

歩く、歩く、ひたすら歩く

前経済学部長 福田 敏 浩

私の心象風景の中に宵闇迫る山辺の道を一目散に駆けているはだしの少年がいる。私は八歳過ぎまで日向の片田舎で暮らした。日本の原風景みたいな山紫水明の土地であったが、そこでは夏になると悪童どもは餓鬼大将の統率のもとに素っ裸で川に入り、はだしで山野を駆け巡った。清流にはアユ、コイ、ハヤ、ウナギ、手長エビなどが沢山いたが、私はなぜかエビ捕りが得意で悪童仲間から一目置かれていた。小刀の「肥後守」を器用に操り竹とゴムと自転車のスポークで水中鉄砲を作り、岩陰や石陰に隠れている手長を仕留めるのである。多い日には素潜りで30匹ほどの水揚げがあり、夕餉に有難く頂戴した。

幼稚園もなく学習塾もない腕白天国の時代だったから日がな一日水辺で遊び呆けていると、慈愛に満ちた天は闇を遣わし帰宅を促す。山の端に日が沈むと悪童どもは蜘蛛の子を散らすように家をめがけてワァーと小走りで去って行く。ぬばたまの闇は恐ろしい。道を照らす街灯も門灯も窓からのこぼれ灯もないから、あたり一面が漆で塗りつぶしたようになる。しかもその先に我が家がある山辺の道ときたら両端に竹藪と雑木林が雑然と並立している。日ごろ村のオヤジどもからさんざん怪談を聞かされ、おどろおどろしい幽霊や化け物を刷り込まれている身であってみれば浮き足立つのは必定、ナマンダー、ナマンダーとばかりに駆け抜ける。ヒトダマを見た気がするが、あれは幻覚であったか。

片道一里ほどの町中にあった小学校には毎日歩いて通った。住んでいた村には自家用自動車は一台もなかったし、自転車も二、三を数えるだけであった。頼りになるのは二本の足のみ。埃り立つ土の道を時に道草を食いながらてくてくと往還した。今ではすっかりセピア色に染まってしまった幼かりし日の小景である。

幼少年期の体験が習い性となり、還暦過ぎの今もなお飽くことなく歩いている。余程の遠出でない限り自動車やバスはおろか自転車にも乗らない。歩く、歩く、ひたすら歩く、一里や二里は何のそののである。とにかく楽しいのである。

理に生きる職業に就いてつくづく思うのは、感性を健康に保つことがいかに大切かということである。感性が萎えると理性も萎え、じっくりと考えることができなくなってしまう。健全な理性は健全な感性に宿るような気がする。瑞々しい感性こそが柔らかく厚みのある理性を育み、その二つが両々相俟って徳を生み人物をつくるのであろう。私の場合何よりも歩くことが感性衰弱を防ぐ滋養剤になっているようである。リズムを刻みながら歩いて行くと体中が清々しくなり、五感が洗われる思いがする。誠に以ってしあわせと言うほかない。知者たらんと欲すれば須らく歩くべしである。